

自由人は眞理の囚人、其の輩出を畢生の大事業と定めた新島であつたが、その晩年は満身創痍。多くの身体不調を訴えた。診断の有無はともかく、書簡には、じつに20以上もの症状の自覚を確認することができる。「眞理」どころか、「病魔の囚人」であることが自覚されていた。

この一首は、群馬県出身の政治家新井毫に宛てた書簡(1889・12・10)に残されている。そこに書かれた「此度之失敗アルモ決而失意落胆ハ不致、又々再挙を計るとの事なり」という自身による解説につづいて、「誰力余之志を継ぎ此事業を成就せしむるあるへしと陳へたるなり」を読めば、すでに希望は後継者に託されようとしていたことが了解される。

いつぼうで、そのわずか3週間後に、新島は「尚壯図を抱いて此の春を迎ふ」と詠んだことも知られた通りである。人生最後の「また来る春」を、大学設立という「大望の囚人」として漲る決意とともに迎えたのであつた。今度は死がさらにその3週間後に迫つて来た。

その「こころ根」を理解するためには、あわせて旧約聖書の「ヤコブは根を下ろし/イスラエルは芽を出し、花を咲かせ/地上をその実りで満たす」(新共同訳・イザヤ書27章6節)を重ねてみたい。病魔に囚われながら、新島の前には終末的希望という、聖書の信仰の豊かな地平が沃野のごとく披かれていたようにおもわれる。

斃るれど其のこころ根の枯れされば
また来る春に花そ咲くらむ

中村信博(女子大学学芸学部教授)